

昭和二十三年九月一日（第三種郵便物認可）
平成二十一年九月一日発行
通巻一〇〇九号（毎月四回）（全九号）

京鹿子

9月号

大師堂
丸山佳子

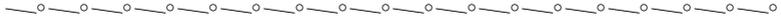
時 の 日 や 京 都 時 間 で 恙 な し

燕 ま で お 香 の 匂 ひ 大 師 堂

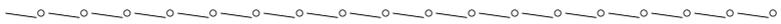
知 ら ぬ ふ り で き ぬ お 方 よ 花 南 天

白 地 着 て わ が 姓 命 の 書 に ふ り が な





万緑にて元氣のみでは恥しい
骨ばなれよい太鮎にも一封を
泣く亀にもすすめてみやう句入門
豪雷や鞆一つの旅人に
山開き女人禁制いまは無く
お帰りと言つてくれない扇風機



豊 田 都 峰

清響集 その八十九

水 打 ち て 夕 星 ひ と つ と も し け り
う ち は 手 に 夕 星 ひ と つ さ そ ひ け り
桐 壺 を 追 へ ば ひ ぐ れ を 落 つ る 沙 羅
沙 羅 の 花 無 定 住 な る き の う け ふ
沙 羅 落 ち て 流 れ る や う に く る ひ ぐ れ
ひ ぐ ら し の と ほ さ に 灯 り さ そ は る



虹立てりけふの名残りをさそふかに
矢車草ひとりあそびの風がまた
灯をいれてより鉾町となりにけり
鉾高く組みあげ屋並ととのへり
砂利みちの灼けて河原へ抜けるべし
炎昼やひたすら南流する鴨川
南流に従けずに天へ反る燕
わが座なる緑陰のただゆたかとする

秀華採集

屈葬のかたちで泣けば水中花

河西 志帆

「屈葬のかたち」を具体的な姿とみるより、ひとつの心象と見、具体的である「水中花」に救いの形と見る、まだそれは囚われの立場であるものの…。

牛蛙相づち下手の一本気

橋本 光乃

桐の花諏訪湖さざなみしてあたり

村田 富美子

前の「牛蛙」のあしらいがたいへんよい。後句の悲史的な「諏訪湖」を配した点を評価したい。

近 詠

雷 雲

鈴 鹿 仁

魚跳ねて雷雲湧きしこと伝ふ
一杓の打水に身の錆洗ふ
鬼灯や女系といふは芯強き
決心と謂ふ悟りあり夏深む
水脈つづく晩夏の港遠くする
葉柳や風のささやき聞き流す
万物の目覚めし山は蟬しぐれ

近 詠

残 暑 光

宇 都 宮 滴 水

だんまりの徑に声あり夏うぐひす
涼しさを頂く仏の膝に触る
しんがりはいつも無口や残暑光
八月や溺れすぎたる岩一つ
残暑なほ子らの歩並の揃はずに
九月尽この道ばかりは避けられず
新涼の貝殻一つ持ち帰る

神麓集



梅干して心の逃げ場残しておく
血の溶ける音に耳貸す五月果つ
昭和の日過ぎし月日の錆匂ふ
沸騰を待たずに冷めて五月闇
説得の味は濃い目にバラの棘

松田 都青

大路葉惑星の水享け留むる
照り降り気嫌に迷ふ更衣
流木の初夏の渚を這ひあがる
儂なきは落葉にまるぶ雨滴星
金雀枝の咲きかたぶけり白微光

白微光 荻野 千枝

通念 彌寝 瓶史

淡泊な一日に暮れて熱帯魚
梅雨夕焼通念変へて鴉飛ぶ
青梅雨に種分け葉の紙多彩
皆傳を盗む途中の紙魚の骸
紙魚避けし頑固な癖字解き曝す

うす紅の恋 北川 孝子

しがらみや露の広葉の日暮雨
ハモニカは昭和の音色燕の子
京茗荷うす紅ほどの恋ごころ
今更の慎重論や夕つばめ
自画像の視線うるうる明易し

車椅子 竹貫 示虹

離りゆく足音ばかり彼岸花
入口も出口も忘れ大花野
月と湖死の静けさに光りあふ
鯖雲や去年は押しきたる車椅子
かるかやや妻は別れに手もふらず

山田をがたま

街に梅雨遂に屋台は灯らず昏る
涙やも顔に筋引く梅雨地蔵
なべて彩蘇るかに梅雨晴間
青葉 雨活 断層を繕ひに
喧騒を地下に閉ぢ込め商都梅雨

神麓集



青 炎 丹生をだまき
満開のつつじまぶしく普茶料理
若葉風口にとろりと胡麻豆腐
当世や男もすなる日焼け止め
露溜めてつゆ草二輪ひそかなる
青炎めく新芽一せい大茶園

高木 智

さくらんぼ甘し病を忘るまで
会場の熱気汗かき汗が引き
大輪の浜木綿開く銚育ち
怠慢な昼に届きし冷菓かな
同病の氏に先立たれ梅雨滂沱

すれ違ふ日傘花柄匂はせて
白南風に岸近く舞ふかもめの群
短夜や逝きし人の面次々と
青晴雨傘さすほどのこともなく
薬臭の口にのこれり芒種の夜

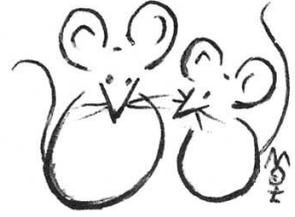
船越 美喜

半夏生 柴田 朱美
決断を延ばしてばかり半夏生
半夏生終日疼く指の傷
廃屋に哭く海鳴りや半夏生
修正液もうきかなくて半夏生
半夏生框を抜ける風の罨

桐の花 川崎光一郎

堰を越す水の滾りや梅雨晴間
草刈つて草の匂ひを湧き立たす
黒南風やくづれて白き波頭
乾坤を奔る真白や梅雨の滝
妣よりも妻との月日桐の花

水中花 伊藤 希眸
土の匂ひ立ちのぼらせて田水張る
堰を落つ水のきらめき五月闇
千年の水音湛へ瀧に壺
水に成る身体髪膚かごまくら
地震の夜のたちまち褪せる水中花



京鹿子集

豊田都峰選

屈葬のかたちで泣けば水中花

蛇穴を出ればざらつく別れかな

花冷えにぶつかる足の小指かな

まつすぐに休め気を付け半夏生

青大将あれもこれもと鈴つけて

燕の子消防車庫に口揃ふ

助け合ふ心ひとつに新茶汲む

つばめ反る民話の里の通し土間

牛蛙相づち下手の一本気

杜青葉勘左工門の甘え声

上田 河西 志帆

福知川 橋本 光乃

水は水雲は雲いる負ひて梅雨

母恋へばせつせつとして梅雨の蝶

初恋ひのななめに終り肉桂水

明るさは風に余力の未央柳

桐の花誼訪湖さざなみしてゐたり

筒鳥や祖国の吾子今帰り道

明日は明日すべき事あり大西日

明易し報告まずは神前に

白靴の並ぶ玄関六月ぶり

夏の星笑顔絶えぬ子傍らに

京都 村田富美子

五ノ子 伊吹 之博